

新しい力

ふたたび子どもたちの中にあつて

長山 篤子

四月は、すべてが新しくなった気持ちになります。お日様の光が人も動物も、植物も新しい光で包み込むように注いで来るように思えます。厳しい寒さ、三月の春を思わせるような暖かさと寒さが交差する日々の後に、甦りを覚えさせられるような四月がやってきます。みんなが新しい力を与えられたような気持ちになり、子どもたちは新学期を迎えます。

私は、二十年近く、幼稚園の現場で働くことから遠ざかっていました。幼稚園の現場に関わり、

子どもたち、先生方の姿にはいつも触れておりましたが、主には、保育者を養成する仕事に力を注いでおりました。自分の保育者、母親としての経験を生かし、子どもたちがどのように成長していくか、その姿を、若い方々に伝えたいと、そのことによって私の保育者としての仕事は終わらせたいと思っておりました。ところが、突然のことでありましたが、一昨年、幼稚園の現場に入る事になりました。私は大変戸惑いました。五十半ばにあります私は、肉体的にとっても子どもたちの

中に入り、子どもと向かい合うのは無理ではないかと思いましたが、生活のリズムも、仕事柄、執筆したり、授業の準備、研究等ですっかり夜型になっておりました。私にとっては、新しい仕事を始めるのに等しく、随分悩みましたが、勇気をもって、このお話をお引き受けることになりました。果たして、その結果半年の間に、大きな怪我を三回、先生方を受けとめることに精神的にも疲れを覚える等やはり無理だったかと、反省させられる一年間を過ごしました。しかし、不思議なことに、次の四月を迎えた時、満開の花を眺め乍ら、私に新しい力が与えられていることに気づきました。それはまさに、倉橋惣三の『育ての心』にある「四月のまごころ」の文章に出てくるその心境でありました。青山学院幼稚園の庭は、手入れの行き届いた庭木の花や前年に植え込んだ花が、四月にはその美しさに気持ちちが奪われるほどに咲き乱れます。

「花が咲いている。どんなに花自ら嬉しいであろう。花が満開している。どんなに花自ら楽しいであろう。その、花自らの喜びを喜びとし、その幸福を祝う心、それが四月のまごころである。……

見よ、子どもらの生活が咲いている。満開している。かれら自らに、どんなに快いことであろう。どんなに喜ばしいことであろう。その、子どもらの幸福を、子どもら自らの心に和して祝う心、それがわれらのまごころである。」（『倉橋惣三選集』第三卷六〇頁）

この文に記されているように、ここには子どもたちの生活が咲いている。そのことによって、私に新しい力が与えられていること、そして子ども心に和して祝うことの出来る幸に気づき心が和みました。花を見ながらこの場で子どもたちに新しい力が与えられることを実感しました。そして子どもたちが咲かせている生活のエピソードを心にかみしめました。

心に残った子どもたちの咲かせた生活の一部を
ご紹介したいと思います。

「じゃ」とは何よ、「いいわよね」とほど
ういうこと!!」

二人の年長女児が楽しそうに「お母さんごっ
こ」をしていました。H子がお母さん、Y子が赤
ちゃん。二人の息はとても合っていました。和や
かな雰囲気の中で二人の会話も、仕度も微笑まし
く楽しい様子でした。私は、こんな遊びが、子
どもたちの中に生まれていることにとても幸せを
感じ乍ら、少し離れたところで見ていました。そ
こに、N子がやってきました。それまで別のところ
で遊んでいましたが、この二人の遊びがあまり
楽しそうなのでその雰囲気を感じたのだなと私は
思っています。N子は「入れて」と言いま
した。二人は一瞬だまりました。顔を見合わせて
いました。N子は再び「入れて」と言いました。

又沈黙が続きました。そしてH子が「じゃ、入っ
て」と言いました。Y子はH子と目を合わせて
「いいわよね」と言いました。N子は一瞬だまり
ました。そして大変憤慨した表情で「Hちゃん

「じゃ」とは何よ「じゃ」ということはいやな
の? Yちゃんも「いいわよね」とはどう言うこ
と」と言いました。Y子は「いいから、いいわよ
ね」と言ったのでしょう。いいじゃない」と言
います。N子は「わよね」ということはただのい
いこととちがうじゃない」と口惜しそうに大きな
目に涙をためて、口を失らせて抗議しました。H
子とY子は、何か図星をつかれたという表情で顔
を見合せていました。H子はふと気を取り直す
ように、「Nちゃんごめんね」と言いました。N
子はニコリと笑い顔になり仲間に入りました。
H子とY子があまり息が合っていましたので私
もN子が仲間に入るのは無理かなと思ってしまし
たが、何とも爽やかな気持ちになりました。そし

て、この三人の子どもが、大人にも負けない、相手の気持ちをキャッチする感性を身につけていることに驚きました。大人の世界のぎくしゃくとした人間関係では、このような相互の気持ちのやり取りは出来ないのではないかとこの情景を受け取りました。

“はっけよいのこった”

年長児のK子とM子がすごい顔で睨み合いをしています。二人共大変怒った様子で腕を組んでいます。しばらくそんな様子が続きました。少し離れたところで見ている私にもその気魄が伝わって来ました。二人共余程意に添わないことがあったのだろうと様子を見ていました。そこを通りかかった同じ年長のA子もびっくりした顔で二人を見ていました。しばらく様子を見ていたA子は突然二人の間に入り、「はっけよいのこった」と仕切りました。私は思わずふき出しそうになりました

た。後で思い出してもA子のその仕種はユーモアに富み大笑いしたくなるような瞬間でした。ところがK子とM子は、いきなりA子に向かって怒りました。M子almaz「ふざけないでよ」とA子に、にじり寄りました。K子は「しんけんなんだ



から」と同じようにA子に、にじり寄りました。

A子は「すまん、すまん」と頭をかかえて逃げ出しました。その様子があまり可笑しかったので私はA子に思わず声をかけました。「はっけよいのこった!!」はよかったのにね」と。A子は、私に「失敗、失敗、お相撲の睨み合いみたいだったからね、フッフ…」と言いました。そして「でもね、二人共真剣に怒っていたんだ!!」とこれも又まことに爽やかに言いのけました。A子の「はっけよいのこった」のセンスにも、A子の二人の睨み合いの状況把握にも、よくもこんな人の気持ちを感じる事が出来る子どもに育っていると感心させられました。A子は、六か月前、弟の誕生に戸惑い、泣いたり怒ったり、保育者にだっこして貰ったりと、私たちを心配させた存在でしたのに、そのことを通して、人の痛みを感じる事が出来るようになったのかとA子の成長をとても嬉しく思いました。

「ぜったいにゆるさない」

年長男児Y夫が大声で泣き乍らU夫を追いかけていました。U夫は笑い乍ら逃げます。ちょうどそのクラスでは、大切な相談ごとがありS先生が、Y夫とU夫の対応が出来ない状況にありましたので私がY夫の抗議を聞くことにしました。U夫は身体が大きく、Y夫を一突きするとY夫は転んでしまいます。泣いて抗議するY夫を突き飛ばしては、U夫は笑って逃げていました。二人を別室に連れて行きY夫に何をそんなに怒っているのか聞きました。Y夫は「僕は、何も悪いことしてないのにU夫が僕のことを蹴飛ばしに来る。いじわるばかりする」と大声で泣いてU夫につきまかかります。U夫は、「こいつは、積木をT夫にぶつけたから僕がしかえしをしているんだ」と言います。Y夫は「それはもうT夫に間違っちゃったからごめんと行ってあやまったんだ。U夫なんか関係ないじゃないか」と益々怒ってU夫につか

みかかりました。小さなY夫でしたが、本気になって怒っている様子にU夫もどうやら、事の次第を理解したようで真剣な顔になり、Y夫の攻撃にたじたじとなりました。そして遂に、U夫はY夫に「ごめんね」と謝りました。ところがY夫は、「絶対に許さない」と言います。大きなU夫は、Y夫の怒りに圧倒され、小さくなってきました。U夫はもう一度Y夫に「ごめんね」と謝りました。攻撃は中止しましたがY夫はまだ泣き乍ら「絶対に許さないからね」とU夫を睨みつけます。遂にU夫は泣き声になって「お願いだから許してよ」と言いました。私も「許してあげたら」とY夫を宥めようと考えましたが、Y夫の怒りと、すっかり小さくなったU夫の様子が何とも、微笑ましく、そのままの状態でその場を離れて見ました。二人はしばらく顔を見合わせていましたが、解決しないままに部屋に戻りました。そして、その日はそのまま降園になりました。翌日、

私は二人の様子が気になり、年長のクラスに様子を見に行きますと、なんと二人は積木で一緒に遊んでいました。「絶対に許さない」「お願いだから許してよ」と二人は交渉がまとまらないままでしたが、そのことを通して、お互いの存在が、今までとは異なった形で重みを持ってきたことを、私は大変嬉しく又頼もしく思いました。

子どもたちの咲かせている生活のエピソードは、尽きることなく私に新しい力、生きる楽しさを教えてくれました。今年度も、子どもの咲かせてくれるエピソードを支えられ乍ら「新しい力」をいただき、怪我のないように子どもと共に歩みを進めていきたいと思っています。

(青山学院幼稚園主事)